



2017年 4月7日 金曜日
(平成29年)

知の技の創造

ものつくり大学究

▷25◁

「生産工学」とは、経営資源の効率的な分配を管理する技術の研究を行う「経営工学」の一部である。よの狭義的には、IE (Industrial Engineering) 手法を駆使した作業者の動作分析、業務の最適化や生産工程の合理化・効率化、資源を減らして製品、サービスをより多く生産するための管理技術及びこれらの研究の手法であると定義

さは計り知れないものがあまった。80年代後半からは、IT 一方でリーマン・ショックの急速な発展によるコトピエ以降、ものづくりの海外進出

り、大学の生産工学教育の必要性は大である。5M管理ができる人材

関根次雄 製造学科名誉教授

生産工学の人材育成



せきね つよお 宇都宮大学工学部精密工学科卒。日立製作所を経て2013年4月ものつくり大学製造学科教授に就任。17年4月から現職。専門は生産工学、生産管理、工場計画、現場改善指導。

1 管理に押され、地味で泥臭いIE手法を使って工程設計や作業分析を行うIEエンジニアの必要性が激減してし

指標として日々取り組んでいる。6大任務は結果の指標であり、実際の目標達成には原因指標となる5M(人・物・設備・方法・計測)の改善管理が必要なので、この5M管理の基本となるのが生産工学である。三現主義に基づき、ものを作るプロセスをよく観察して、「動きの無駄をなくす」「設備のロスをなくす」「プロセスを安定させる」といった定量的な分析・改善活動ができる人材である。大学でどう育てるか 大学には継続的にものを作る現場が存在せず、座学・演習中心の教育だけではものづくり現場の課題把握や問題分析が難しい。そこで、産学連携と生産工学人材育成の一環として始めたのが、「ものづくり現場活性化支援事業」である。企業で長年生産工学での経験を積んで定年退職した人材を大学が支援アドバイザーとして登録し、企業からの現場改革支援要請に対してアドバイザーを派遣して業務支援するもので、この指導会に学生も参加させることで、実務を通して生産工学教育を深化させていく。

現場が急増した今日、現地化推進のものづくりの現場では、Q(品質)C(コスト)D(納期)S(安全)M(モラル)を教育・指導できる人材の不足が深刻な問題になってお E(環境)の6大任務を管理の続ける現場が存在せず、座